

ハウス病虫害の

防除と薬剤 (完)

全購連東京支所肥料資材部
技術主管・農学博士

白 浜 賢 一

トマトはかび病の防ぎ方

トマトはかび病は多湿で通気の悪い畑では、気温がやや高目となると露地でも若干発生するが、ハウスの被害が著しい。従前は発生しはじめると蔓延防止が困難なので、ハウス内に定植した時から定期的に薬剤散布して予防してきたが、効果の高い薬剤がでてきて、防除は大変楽になった。

妙なことにこれらの薬剤は短期間隔で連続散布すると、トマトに薬害を与えるので、発病を認めた都度散布するか、他剤との組合せで、散布間隔を遠くする。防除には次の薬剤が使用される。

ポリオキシシンAL水和剤 (前月号に前出)

本剤ははかび病に高い治療効果を示す。500～1,000倍液を芯葉3—4枚にかからないようにして、発病を認めた都度散布するか、灰色かび病や菌核病の防除を兼ね、スクレックスとポリオキシシンを5日おきに交互散布すれば、ポリオキシシンの散布間隔は10日おきとなるので薬害の心配はない。ポリオキシシンはくん煙防除には使えない。

ピオマイ水和剤 (前月号前出)

1,000～2,000倍液をポリオキシシンAL水和剤に準じて散布する。くん煙防除には使えない。

カスミンC水和剤 (カスガマイシン—塩酸塩3,4%, オーンサイド30%)

稲のいもち病に高い効果を示すカスガマイシンは、トマトはかび病にも高い治療効果を示す。

本剤はトマトの疫病や輪紋病などに効果を示すオーンサイドに、カスガマイシンを加え、ハウス内のトマトの地上部の糸状菌病の防除を併せてねらった薬剤だが、トマトに短かい間隔で連続散布すると薬害を生ずるので、1,000倍液をはかび病の発生を認めた都度、まんえん防止のため散布する。連続散布ができないので、トマト疫病やキウリ露菌病などの防除には、他剤と交互散布する。

ベンレート水和剤 (前月号前出)

未登録だが、ベンレート水和剤はトマトはかび

病にも優れた予防効果を示す。市販品の主成分含量がまだきまっていないので、散布濃度ははっきりしないが3,000～4,000倍ぐらいとなろう。

うどんこ病の防ぎ方

作物により病原菌の種類はことなり、性質にも違いはあるが、瓜類、ピーマン、イチゴのハウス栽培では、うどんこ病の被害が多い。最近ナスやトマトでもうどんこ病の発生が増加している。

イチゴのうどんこ病菌は高温の時は休眠するので、夏期はまんえんしないが、冬期間はよく発生し、イチゴの実をよく侵すので被害が甚しい。

着果期を促進するため、ハウス内に定植前山あげしたり、株を冷蔵すると早く低温に遭うため、イチゴのうどんこ病菌が活動しはじめ、ハウス内で早くからまんえんしはじめるので、被害が甚しくなる。

瓜類やピーマン、ナス、トマトのうどんこ病菌は高温で湿度70%、通風の悪い時によくまんえんするので、露地栽培では夏から秋にかけ発病が多いが、ハウス内では条件次第で、いつでも発生するので、作物の幼い時期からでも被害を受ける。

イチゴ以外の作物では、発病を認めてから散布しても、くん煙防除を行っても、比較的容易に防除できるが、イチゴではハウスに定植する前からよく予防しておかなければならない。うどんこ病の防除には次の薬剤が使用される。

デブシー水和剤 (DPL37%含有)

予防散布の場合も、発病を認めてからの防止の場合も、2,500倍液を7日おきに散布する。

イチゴ以外の作物は、葉表に菌が繁殖するので防除しやすいが、イチゴは葉裏で繁殖するから、着果前は葉裏に薬がよくつくよう注意し、山あげ中や、株冷蔵を行う前後は特に丁寧に散布する。

モレストン水和剤

3,000倍液をデブシー水和剤と同じように使用する。但し使用する時は単独で散布する。

モレストンH50 (モレストン50%含有)

イチゴは薬害を起すので使えないが、イチゴ以外のうどんこ病は、モレストンH50をサーチでくん煙しても防除することができる。くん煙間隔は7日おき、10a 当り180gを、15—20個のサーチをハウス内に均等に配置して、夕刻ハウスを密閉してくん煙する。

ピーマンの半促成栽培や早熟栽培では栽培期間が長く、ピーマンが大きくなって繁茂するので、こういう場合は薬量を増加しなければならない。

ポリオキシソール水和剤およびピオマイ水和剤

これら両剤はうどんこ病にもすぐれた効果を示す。ポリオキシソール水和剤はイチゴは500倍、その他の作物には500～1,000倍液、ピオマイ水和剤はイチゴには1,000倍、その他の作物には1,000～2,000倍液を使用する。

特にイチゴでは、これら両剤は灰色かび病にも、芽枯病にも卓効を示すので、ダナーと福羽の2品種は、ハウス内ではこれら両剤のいずれかを散布すれば、総合防除できるので大変便利である。

しかし、これらはホウヨクや久留米など葉が黄色目の品種には薬害を起すので使ってはならない

トップジン水和剤 (前月号に前出)

トップジン水和剤はうどんこ病にも効果があるので、菌核病、灰色かび病その他の病害と(疫病や露菌病には効かない)併せて防除できる。

瓜類では500～1,000倍液を使用する。イチゴにも登録許可になっているが、収穫前7日前まで1回限りという規制があるので、実際上使えない。

サンヨール (DBEDL20%含有)

うどんこ病にすぐれた効果があり、瓜類とイチゴに登録がある。特にイチゴは、ポリオキシソール水和剤やピオマイ水和剤が薬害を起す福羽、ダナー以外の品種にも、薬害なく使用できるので、それらの品種のうどんこ病防除に賞用されている

ただし、本剤は銅を含有しているので、瓜類の場合でも、イチゴの場合でも、他の病害防除にエムダイファーなら有機硫黄剤を使用する時、サンヨールと有機硫黄剤を7日より短い間隔で散布すると、薬害を生ずるので注意する。

キュウリ黒星病の防ぎ方

キュウリ黒星病は18°Cの時に発生しやすい病害である。露地栽培でも5、6月低温の場合とか、東北地方では8月下旬から9月にかけて多発するが、ハウスでは外気温の低い時に多発する。本病は発生しはじめると、まんえんが急激であるから、発病の予測される時とか、発病を認めた時は、3—4回連続散布を行って、まんえんを防止する。

キュウリの芯の部分、幼果、葉縁の軟弱部分が特

に侵されやすいから、この部分によく薬剤を散布する。高い効果を示す薬剤は次の4つしかない。

ポリオキシソール水和剤およびピオマイ水和剤 (前出)

ポリオキシソール水和剤は500倍、ピオマイ水和剤は1,000倍液を使用する。

トリアジン水和剤 (トリアジン50%含有)

600倍液を散布する。トリアジンはそさいの地上部菌類病に対し広い予防効果を有するが、皮ふかぶれを生じやすいから、散布する場合、手や顔などに薬液がかからないよう装備して散布する。

トップジン、M水和剤・剤未登録 (メチルチオファネート50%)

トップジンはエチルチオファネートを主成分とする薬剤であるが、トップジンMはその類似化合物で、メチルチオファネートを主成分とする。トップジンMは今までの試験の結果では、トップジンより効果がすぐれ、適用病害の幅も広い。

キュウリ黒星病に対しても現在ある薬剤の中では最もすぐれた効果を示すことが知られている。

瓜類露菌病、トマト疫病、ナス黒枯病その他の地上部病害の防ぎ方

ナス黒枯病はハウスだけで発生する病害であるが、他は露地栽培の場合と共通である。ただ、ハウス内では、発病するとまんえんが急激であるから、常に予防的に散布を行って未然に防除して行くことが大切である。また、ハウスであるため、くん煙防除も行なうことができる。

ダコニール水和剤 (TPN50%含有)

散布には600～800倍液を5—7日おきに使用する。くん煙防除は、10アール当り200gをサーチ15—20個をハウス内に均等に配置して、夕刻ハウスを密閉してから行う。

ダコニールは散布でかぶれるようなことはほとんどないが、ダコニールの煙のただよっているところに入ると、皮ふかぶれを生ずるから注意する。

エムダイファー水和剤 (マンネブ70%含有)

600倍液を7日おきに定期的に散布する。キュウリには白いぼの系統のもの、黒いぼの系統のものがあるが、中部地方以北に栽培の多い白いぼ系のキュウリはマンネブ剤を散布すると、生理的な薬害を起すので、白いぼ系のキュウリを栽培しているところでは使用をさける。